研究

府縣市町村より見たる道路事業（十）

平井良成

郡區編制法ニ依リ郡區設置　明治十三年五月五日太政官布告第二二號を以て郡區編制法に依り從前の一郡を分割し或は新に郡名を設け又は區を設置せられた、其府縣、國、郡區は左の通である。

東京府、武藏國

「豐島ノ內」麴町區、神田區、日本橋區、京橋區、芝區、麻布區、赤坂區、四谷區、牛込區、小石川區、本郷區、下谷區、淺草區、本所區、深川區

「豐島」北豐島郡、南葛飾郡、南足立郡、東多摩郡、南豐島郡

京都府、山城國

「愛宕、葛野ノ內」上京區

「紀伊ノ內」伏見區、下京區

同府、丹波國

「桑田」南桑田郡、北桑田郡

大阪府、攝津國

「西成ノ內」東區、西區、南區、北區

神奈川縣、武藏國

「久良岐ノ內」橫濱區

「多摩」西多摩郡、南多摩郡、北多摩郡

兵庫縣、攝津國

「八部ノ內」神戶區

長崎縣、肥前國

「彼杵ノ內」長崎區

「彼杵」西彼杵郡、東彼杵郡

「高來」北高來郡、南高來郡

「松浦」東松浦郡、西松浦郡、南松浦郡、北松浦郡

新潟縣、越後國

「蒲原ノ內」新潟區

「蒲原」北蒲原郡、中蒲原郡、西蒲原郡、南蒲原郡、

「魚沼」北魚沼郡、中魚沼郡、南魚沼郡

「頸城」東頸城郡、中頸城郡、西頸城郡

埼玉縣、武藏國

「埼玉」南埼玉郡、北埼玉郡、北葛城郡、北足立郡、

同、下總國

中葛飾郡

群馬縣、上野國

「群馬」東群馬郡、西群馬郡

「勢多」南勢多郡、北勢多郡

「甘樂」南甘樂郡、北甘樂郡

千葉縣、上總國

上植生郡

同、下總國

東葛飾郡、下植生郡、南相馬郡

茨城縣、常陸國

「茨城」東茨城郡、西茨城郡

同、下總國

北相馬郡、西葛飾郡

栃木縣、下野國

「都賀」上都賀郡、下都賀郡

堺縣、和泉國

「大鳥ノ內」堺區

三重縣、紀伊國
「牟婁」南牟婁郡、北牟婁郡
愛知縣、尾張國
「愛知ノ內」名古屋區
「春日井」東春井郡、西春井郡
同、三河國
「加茂」東加茂郡、西加茂郡
「設樂」北設樂郡、南設樂郡
山梨縣、甲斐國
「山梨」東山梨郡、西山梨郡
「八代」東八代郡、西八代郡
「巨摩」北巨摩郡、中巨摩郡、南巨摩郡
「都留」南都留郡、北都留郡
滋賀縣、近江國
「淺井」東淺井郡、西淺井郡
岐阜縣、美濃國
「石津」上石津郡、下石津郡
長野縣、信濃國
「佐久」南佐久郡、北佐久郡「伊那」上伊那郡、下伊那郡
「筑摩」西筑摩郡、東筑摩郡、「安曇」南安曇郡、北安曇郡「水內」上水內郡、下水內郡
「高井」上高井郡、下高井郡
宮城縣、陸前國
「宮城ノ內」仙臺區
福島縣、岩代國
「會津」南會津郡、北會津郡
同、磐城國
西白河郡、東白河郡
同、越後國
東蒲原郡
山形縣、羽前國
「田川」東田川郡、西田川郡、「村山」南村山郡、東村山郡、西村山郡、北村山郡「置賜」西置賜郡、東置賜

郡、南置賜郡

秋田縣、羽後國

「秋田」南秋田郡、北秋田郡

岩手縣、陸中國

「岩手」南岩手郡、北岩手郡「和賀」東和賀郡、西和賀郡「磐井」西磐井郡、東磐井郡「九戸」南九戸郡、北九戸郡「閉伊」西閉伊郡、南閉伊郡、、東閉伊郡、中閉井郡、北閉井郡

青森縣、陸奥國

「北郡」上北郡、下北郡「津輕」東津輕郡、西津輕郡中津輕郡、南津輕郡、北津輕郡

石川縣、加賀國

「河北、石川ノ內」金澤區

同、越中國

「新川」上新川郡、下新川郡

岡山縣、備前國

「御野、上道ノ內」岡山區

廣島縣、安藝國

「安藝、沼田ノ內」廣島區

山口縣、長門國

「豐浦ノ內」赤間關區

愛媛縣、伊豫國

「浮穴」上浮穴郡、下浮穴郡「宇和」東宇和郡、西宇和郡、南宇和郡、北宇和郡

同、讃岐國

小豆郡

和歌山縣、紀伊國

「名草、海部ノ內」和歌山區

「牟婁」東牟婁郡、西牟婁郡

福岡縣、筑前國

「早良、那珂ノ內」福岡區

大分縣、豐後國

「國東」西國東郡、東國東郡

「海郡」北海部郡、南海部郡

熊本縣、肥後國

「飽田、託摩ノ内」熊本區

地租改正當初定メタル地價十八年迄据置收稅特別及地價修正方　十三年五月二十日太政官布告第二五號を以て明治七年第五三號を以て地租改正後五箇年間は當初定めたる地價に據り收稅致すへき旨布告したるも仍ほ明治十八年迄据置收稅の旨を達せらる。

地方稅規則第十條追加　十三年五月二十七日太政官布告第二六號を以て明治十三年四月第一六號布告に左の一條を追加せらる。

第十條　區ノ地方稅ニ係ルハ經費府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ內務卿ニ具狀シ其裁定ヲ得テ郡ノ經營費ト之ヲ分別スルコトヲ得

東京府地方稅取扱方　十三年五月二十七日太政官布告第二七號を以て東京府地方稅取扱方を左の通定めらる。

第一條　東京府ノ營業稅雜種稅ハ府會ノ決議ヲ經テ內務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ得テ其制限ヲ殊ニスルコトヲ得

第二條　東京府ハ府會ノ決議ニヨリ水道費瓦斯燈費及ヒ火災豫防費ヲ以テ地方稅費用中ニ加フルコトヲ得

備荒儲蓄法制定　十三年六月十五日太政官布告第三一號を以て備荒儲蓄法を制定せられ十三年度（明治十四年一月一日）より施行し明治八年七月第一二二號達窮民一時救助規則及同十年九月第六二號布告凶歲租稅延納規則を廢止の旨を達せらる。

傳染病豫防規則制定　十三年七月九日太政官布告第三四號を以て傳染病豫防規則を制定し明治十二年八月には第三二號虎列刺病豫防假視則を廢すらる。

刑法制定　十三年七月十七日太政官布告第三六號を以て刑法を制定せらる總則公益ニ關スル重罪輕罪身體財產ニ對スル重罪輕罪違警罪四百三十條を以て規定す。參照（明治元年十月「九一六」刑律ハ假ニ舊幕府ヘ委任ノ刑律ニ仍リ其中磔刑ハ弑刑ニ限リ其他ノ重罪及禁刑ハ梟首ニ換ヘ追放所拂ハ徒刑ニ換ヘ流刑ハ蝦夷地ニ限リ盜竊

百兩以下ハ罪不至死トシ死刑ハ勅裁ヲ仰カシム〇二年七月晒引廻シ鋸引ヲ廢ス〇二年八月磔梟首刎首徒刑笞刑ノ刑名ヲ改正ス〇三年正月財產沒籍ノ法ヲ停ム〇三年七月「四三七」僞造寶貨律ヲ定ム〇三年八月「五二一」販賣鴉片烟律ヲ定ム〇三年十一月「八三九」北海道流所規則ヲ定ムルマテ暫ラク流刑ヲ停メ準流刑ヲ設ク〇三年十二月「九四四」新律綱領ヲ頒布ス〇四年正月「三三」寶貨僞造律ノ內三等流ハ準流法ニ照準セシム〇六年太政官「二〇六」改定律例ヲ公布ス〇八年「二〇」布告讒謗律ヲ定ム〇十三年「三六」號布告刑法ヲ改定ス〇十四年「三六」布告十五年一月一日ヨリ刑法施行)

治罪法制定 十三年七月十七日太政官布告第三七號を以て治罪法を發布せらる。

酒造稅則 十三年九月二十七日太政官布告第四〇號を以て酒造稅則を定めらる。

新聞紙雜誌禁止停止 十三年十月十二日太政官布告第四五號を以て明治九年七月第九八號布告を以て左の通改正

已ニ許可ヲ得タル新聞紙雜誌雜報國安を妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認メタルトキハ內務卿ニ於テ其發行ヲ禁止シ又ハ停止スヘシ。

歲計節約紙幣銷却ノ元資增加ニ付地方稅規則中改正增加 十三年十一月五日太政官布告第四八號ヲ以テ歲計ヲ節約し紙幣銷却の元資を增加し併せて地方の政務を改良するの要用なるを察し左の通制定すと布告せらる。

第一條　本年四月第一六號布告第一條地方稅目中「地租五分一以內」トアルヲ「地租三分一以內」ト改定ス。

第二條　同上布告第三條地方稅ヲ以テ支辨スヘキ費用中左ノ三項ヲ增加ス。

一、府縣廳舍建築修繕費

一、府縣監獄費

一、府縣監獄建築修繕費

第三條　地方稅ヲ以テ支辨スヘキ府縣土木、(卽チ河港道路、堤防、橋梁、建築、修繕)費中官費下渡金ハ來ル十四年度ヨリ廢止トス。

府縣會規則追加　十三年十一月五日太政官布告第四九號を以て十三年四月第一五號布告府縣會規則に追加せらる（本誌第十五卷第七號項參照）

土地賣買讓渡規則　十三年十一月三十日太政官布告第五二號を以て土地賣買讓渡規則を制定せられ明治八年六月一〇六布告同年十月第一五三號布告を廢止せらる。

京都府管下伏見區廢止　明治十四年一月十日太政官布告第一號を以て伏見區を廢止せらる。

福井縣ヲ置キ堺縣ヲ廢シ大阪府ヘ合併　十四年二月七日太政官布告第三號を以て福井縣ヲ置キ越前若狹兩國一圓管轄セシメ堺縣ヲ廢シ大阪府ヘ合併。

府縣會規則中追加削除　十四年二月七日太政官布告第四號を以て府縣會規則中第五條第九條第三十三條第三十四條第三十七條に追加削除を加ふ（本誌第十五卷第七號參照）

地方稅規則中追加削除　十四年二月十四日太政官布告第五號を以て地方稅規則中第三條第五條第七條第八條に改正を加ふ（本誌第十五卷第七號參照）

府縣會ノ議定スベキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土功會ノ議決ニ付スルヲ得　十四年二月十四日太政官布告第六號を以て「府縣會ハ其議定スヘキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土功會ノ議決ニ付スルヲ得ヘシ」と定めらる（本誌第十五卷第七號參照）

區町村會法第八條改正　十四年二月十四日太政官布告第七號を以て區町村會法第八條を「水利土功ノ爲メ其關係アル人民ノ集會ヲ要スルトキハ其地方ノ便宜ニ從ヒ規則ヲ設ケ府知事縣令ノ裁定ヲ受クヘシ」と改正せらる（本誌第十五卷第七號參照）

府縣會ニ區部會郡部會ヲ設クルコトヲ得ノ件　十四年二月十四日太政官布告第八號を以て「東京府京都府大阪府神奈川縣會ヲ分テ區部會郡部會ト爲スノ件」を定めらる（本誌第十五卷第七號參照）

地方稅中營業稅雜種稅ノ種類制限中追加　十四年二月十四日太政官布告第九號を以て明治十三年四月太政官布告第一七號第二條中製造所の下に「職工」を追加せらる（本誌第

十五卷第七號參照）

地方稅規則中改正　十四年二月十四日太政官布告第十號を以て地方稅規則第三條中に改正を加へらる（本誌第十五卷第七號參照）

地租徵收期限改定　十四年二月十七日太政官布告第十四號を以て地租徵收期限を改定せらる。

府縣警察費ニ對シ國庫下渡歩合　十四年二月十八日太政官布告第一六號を以て府縣警察費に對し國庫より下渡し金の割合を十四年度より左の通定めらる。

一、東京府ハ警察費總高ノ十分ノ六

一、京都府大阪府幷各縣ハ地方稅支出高ノ十分ノ三

區町村會若クハ水利土功ノ集合ニ於テ評決シル土木費怠納者處分方　十四年四月十九日太政官布告第二四號を以て「區町村會若クハ水利土功ノ集會ニ於テ評決シタル土木費ノ怠納者ハ明治十年十一月第七九號布告ニ據リ處分スヘシ」と定めらる。

鳥取縣ヲ置キ因幡伯耆兩國ヲ管セシム　十四年九月十二日太政官布告第四二號を以て鳥取縣ヲ置キ因幡伯耆兩國一圓ヲ管轄せしむ。

褒賞條例制定　十四年十二月七日太政官布告第六三號を以て褒賞條例を制定せらる（明治二三年勅令第七二號改正）

地方稅規則中改正　明治十五年一月二十日太政官布告第二號を以て地方稅規則中に改正を加へらる（本誌第十五卷第七號參照）

地方稅營業稅雜種稅規則中改正　十五年一月二十日太政官布告第三號を以て明治十三年四月第一七號布告營業稅雜稅規則中に改正を加へらる（本誌第十五卷第七號參照）

府縣會規則中改正　十五年二月十四日太政官布告第一〇號を以て府縣會規則中に改正を加へらる（本誌第十五卷第七四號）參照

區町村會法中改正　十五年二月十四日太政官布告第一一號を以て區町村會法中に改正を加へらる（本誌第十五卷第七號參照）

區郡部會規則中改正　十五年二月十四日太政官布告第一二號を以て明治十四年二月第八號布告區郡部會規則を改正せらる（本誌第十五卷第七號參照）

公用地除稅ノ件　十五年七月二十八日太政官布告第三五號を以て明治十年二月第十八號布告第三條を左の通改正せらる。

「民有地ヲ官ノ許可ヲ得テ川溝溜池道路堤塘敷其他潰シ地トナス時ハ工事著手ノ月ヨリ除稅スヘシ一旦著手スルモ若シ工事ヲ中止シテ六ケ月ニ及フモノハ工事ヲ施シタル部分ヲ除キ其中止間ハ除稅ノ限ニ在ラス

但七ケ月以上ニ涉ルヘキ工事ハ六ケ月毎ニ其工程ヲ量リ除稅ノ區域ヲ定ムルモノトス

戒嚴令　十五年八月五日太政官布告第三六號を以て戒嚴令を制定せらる。

法律規則中戰時ト稱スルハ布告ヲ以テ定ム　十五年八月五日太政官布告第三七號を以て左の通定めらる。

「凡ソ法律規則中戰時ト稱スルハ外患又ハ內亂アルニ際シ布告ヲ以テ定ムルモノトス」

徵發令　十五年八月十二日太政官布告第四三號を以て徵發令を制定せらる。

諸額規則　十五年十二月十二日太政官布告第五八號を以て請願規則を定めらる。

府縣會規則中改正　十五年十二月二十八日太政官布告第六八號を以て府縣會規則第六條第三十一條乃至第三十三條第三十七條に改正を加へらる（本誌第十五卷第七號參照）

地方規則中改正　十五年十二月二十八日太政官布告第六九號を以て地方稅規則第三條第四條及第五條に改正を加へらる（本誌第十五卷第七號參照）

府縣會議員聯合集會等ヲ許可サス及其違犯者處分　十五年十月二月二十八日太政官布告第七〇號を以て府縣會議員會議に關する事項を以て聯合集會又は往復通信を爲すを禁止せられ且其違犯者を處罰することと定めらる（本誌第十五卷第七號參照）

人民私費架設ノ橋梁渡津及私費開鑿ノ道路等郵便脚夫ニ對シ賃錢請求ヲ得ス　十五年三月十三日內務省達乙第一八號を以て「人民私費ヲ以テ架設ノ橋梁渡津及ヒ私費開鑿ノ道路等郵便脚夫ノ飛信遞送並郵便送付配（特ニ配達人タルヲ證スル服ヲ著シ配達スルトキ）ノ時ニ限リ賃錢請求不相成候條兼テ許可有之架橋渡船及ヒ開路願人共へ無洩可相達」と達せらる。

褒賞條例ニ依ル褒賞方　明治十六年一月四日太政官布告第一號を以て明治十四年十二月太政官布告第六三號褒章條例ニ依リ褒章を賜ふへき者又は公益の爲めに金穀財產等を寄附したる者は金銀木杯若くは金圓を賜ひ又は褒章と金銀木杯金圓を併せ賜ふことあるべき旨を達せらる。

郡區長給料施費十六年度以後國庫ヨリ支辯　十六年三月二十一日太政官布告第七號を以て郡區長の給料及旅費は來る十六年度以後國庫より支辯する旨を達せらる。

造幣規則　十六年五月二十六日太政官布達第一五號を以て造幣規則施行の旨を布達せらる。

郵便局印鑑所持ノ郵便脚夫ニ對シ橋錢渡錢通行錢等ヲ請求スルコトヲ得サル件　十六年六月八日內務省達乙第三十一號を以て「人民私費ヲ以テ架設ノ橋梁渡津及私費開鑿ノ道路等郵便脚夫ノ飛信遞送置郵便物遞送集配（特ニ配達人タルヲ證スル服ヲ著シ配達スル時）ノ時ニ限リ賃錢請求不相成旨客年（十五年）三月當省乙第一八號ヲ以テ相達候處自今郵便局ヨリ左ノ如キ（省略）印鑑相渡置候條右所持ノ者ハ制服ノ著否ニ拘ハラス賃錢請求不相成儀ト可心得此旨免許人共へ遺漏ナク達シ置クヘシ」と達せらる。

宮崎縣下日向國臼杵郡河北諸縣ノ三郡分割　明治十七年一月二十六日太政官布告第三號を以て明治十一年七月第一七號布告郡區町村編制法に依り宮崎縣下日向國印杵郡珂北諸縣の三郡を西臼杵郡、東臼杵郡、北那珂郡、南那珂郡、北諸縣郡、西諸縣郡、東諸縣郡に分割せらる。

地租條例制定　十七年三月十五日太政官布告第七號を以て地租條例を制定し明治六年七月第二七二號布告地租

改正條例及地租改正に關する條規等を廢止せらる（二二十二年法律第一號を以て改正を加へられた。）

海軍治罪法　十七年三月二十一日太政官布告第八號を以て海軍治罪法を制定せる。

質屋取締條例　十七年三月二十五日太政官布告第九號を以て質屋取締條例を發布せらる。

地方稅規則中改正　十七年五月七日太政官布告第一三號を以て明治十三年四月第一六號布告地方稅規則第三條第一五項ニ「戶長以下給料旅費」を追加せらる。

區町村會法　十七年五月七日太政官布告第一四號を以て明治十三年四月第一八號布告區町村會法の全文に改正を加へらる（本誌第十五卷第七號參照）

區町村費及水利土功會評決ノ土木費怠納者處分方　十七年五月七日太政官布告第一五號を以て明治十四年四月第二四號布告を廢止し左の規程を發布せらる。

區町村會ニ於テ評決シタル區町村費及ヒ水利土功會ニ於テ評決シタル土木費ノ怠納者ハ總テ明治十年十一月七十九號布告ニ據リ處分ス可シ若シ財產公賣ノ際買受望人ナキトキハ官沒ノ手續ヲ爲サス郡區長又ハ戶長ニ於テ之ヲ管掌シ會議ノ評決ヲ取リ府知事縣令ノ認可ヲ得テ處分スヘシ

兌換銀行券條例制定　十七年五月二十六日太政官布告第一八號ヲ以テ兌換銀行券條例が制定せられた。

商標條例制定　十七年六月七日太政官布告第一九號を以て商標條例が制定せされた。

單身戶主死亡又ハ除籍者絕家期限　十七年六月十日太政官第二〇號を以て單身戶主死亡又は除籍の日より滿六箇月以內に跡相續者を屆出ざる者は總て絕家とすと定められた。

區町村費ニ關シ不服出訴方　十七年七月四日太政官布告第二三號を以て「區町村會ニ於テ評決シタル區町村費ニ關シ不服アリテ出訴セントスルモノハ都テ明治十五年五月第二十二號布告ニ依ルヘシ」と定められた。

地方稅規則中改正　十七年十二月八日太政官布告第二九號を

以て「明治十三年四月第十六號布告地方稅規則第四條第一項左ノ通改正シ明治十九年度ヨリ施行ス但明治十八年度ハ明治十八年七月ヨリ翌年三月マテ九箇月ヲ以テ一周年度トス

其年四月ヨリ翌年三月迄ヲ一周年度トナシ府知事縣令ハ前年十月迄ニ地方稅ヲ以テ支辦スヘキ經費ノ豫算並地方稅徵收ノ豫算ヲ立テ翌年度ノ定額トナシ其府縣令ノ議決ヲ取リ其年二月ヲ以テ內務卿及大藏卿ニ報告スヘシ

民有森林中國土保安ニ關係アル箇所樹木斫伐鑛物土石掘採停止ノ布達改正　十七年一月二十日ハ太政官布達第三號を以て明治十五年二月第三號布達を「民有森林ノ中水源ヲ養ヒ土砂ヲ止メ又ハ風潮ヲ防キ頽雪ヲ支フルノ類國土保安ニ關係アル箇所ニシテ漫ニ其樹木ヲ斫伐シ鑛物土石ヲ掘採セハ他ニ障害ヲ及ホスコト不尠ニ付是等ノ箇所ハ實地ノ景狀ニヨリ其事業ヲ停止セシムルコトアルヘシ

徵兵事務條例ノ制定　十七年七月十九日太政官布達第一八號を以て徵兵事務條例を定めらる（二二年勅令第一三號を以て改正）

墓地及埋葬取締規則制定　十七年十月四日太政官布達第二五號を以て墓地及埋葬取締規則を定めらる。

官吏恩給令　十七年一月四日太政官達第一號を以て官吏恩給令を定めらる。

專賣特許條例制定　明治八年四月十八日太政官布告第七號を以て專賣特許條例を制定された。

電信條例の改正　十八年五月七日太政官布告第八號を以て從前の電信に關する布告其他布達等を廢止し電信條例を制定せらる。

醬油稅規則制定　十八年五月八日太政官布告第一〇號を以て醬油稅規則を定めらる。

菓子稅規則制定　十八年五月八日太政官布告第一一號を以て菓子稅規則を定あらる。

預金規則制定　十八年五月三十日太政官布告第一三號を以て預金規則が定めらる。

屯田兵條例ノ制定　十八年五月五日太政官達第一八號を以

て屯田兵條例を制定せらる。

地租徵收期限第三期以下改正　十八年六月六日太政官布告第一五號を以て明治十四年二月第一四號布告地租稅徵收期限第三期以下に改正を加へらる。

海軍志願兵徵募規則　十八年六月十三日太政官布達を以て海軍志願兵徵募規則が定めらる。

土地ニ賦課スル區町村費ハ明治十九年度ヨリ地租七分ノ一ヲ超過スベカラサルノ法　十八年八月十二日太政官布達第二五號を以て「土地ニ賦課スル區町村費ハ明治十九年度ヨリ地租七分ノ一ヲ超過スルヲ得ス但非常ノ費用ハ（豫知スヘカラサル天災時變ノ費用ヲ云）別ニ賦課スルヲ得此場合ニ於テハ區町村會若クハ水利土功會ノ評決ヲ取リ府縣知事縣令ノ指揮ヲ請フヘシ」と定めらる。

種痘規則ノ制定　十八年十一月九日太政官布告第三四號を以て種痘規則が發布せらる。

內閣官制ノ詔　十八年十二月二十三日內閣改制の詔が渙發せられた。卽ち

詔　勅

朕惟フニ經國ノ要ハ官其制ヲ定メテ機關各其所ヲ得ルニ在リ內閣ハ萬機親裁專ラ統一簡捷ヲ要スヘシ今其組織ヲ改メ諸大臣ヲシテ各其重責ニ當ラシメ統フルニ內閣總理大臣ヲ以テシ以テ從前各省太政官ニ隷屬シ上申下行經由繁複ナルノ弊ヲ免レシム乃各部ニ至テハ官守ヲ明カニシ以テ濫弊ヲ除キ選叙ヲ精クシ以テ才能ヲ待チ繁文ヲ省キ以テ淹滯ヲ通シ冗費ヲ節シ以テ急要ヲ擧ケ規律ヲ嚴ニシ以テ官紀ヲ肅ニシ徐クニ以テ施政ノ整理ヲ圖ラントス是レ朕カ諸大臣ニ望ム所ナリ中興ノ政一タヒハ進ミ一タヒハ退クヘカラス華ヲ去リ實ヲ務メ綱擧リ目張リ永遠繼クヘカラシム諸臣其レ各朕カ意ヲ體シテ奉行スル所アレ

奉　勅　　內閣總理大臣伯爵　伊藤　博文

內閣ノ組織ヲ改メント乞フノ奏議

太政大臣奏請

臣躬豪鼎ノ重キヲ荷ヒ日夕憂懼以テ報効ヲ圖ル嚮キニ親シク

陛下內閣ヲ改制スルノ旨ヲ承ク幸ニ微衷ヲ披キテ以テ
聖德ヲ仰クノ機ヲ得タリ竊ニ思フ今日ノ事前途猶遠シ立憲ノ基ヲ建テ以テ中興ノ業ヲ終ヘントセハ區々前轍ニ因習スルノ能ク成スヘキ所ニ非サルナリ維新ノ初
陛下幼冲臣寵撰ヲ叨リニシ大政ヲ董督ス實ニ已ムコトヲ得サルニ出ツ蓋大寶ノ令唐ノ尙書省ニ倣ヒ太政官ヲ以テ八省ヲ統ヘハ省ハ左右辨ニ分屬シ官符ヲ得テ施行ス明治二年職員令ヲ定メ六省ヲ置クニ當テ仍大寶ノ制ニ依リ太政官ヲ以テ諸省ノ冠首トシ諸省ヲ以テ隷屬ノ分官トス此レヨリノ後諸省ハ專ラ指令ヲ太政官ニ仰キ太政官ハ批ヲ下シテ施行セシメ凡ソ文書ノ上奏スル者ハ皆太政官ニ經由シ往復ノ間省ノ寮ニ於ケルニ均シ此レ蓋一時ノ權宜ニシテ獨　親政統一ノ體ヲ得サルノミナラス亦各省長官ノ責任ヲ輕クシ徒ニ曠滯ノ弊ヲ爲ス者ナリ方ニ今
陛下聖德日ニ躋リ大政ヲ綜攬シ事ヲ內閣ニ視諸宰臣ヲ引見シ文武ノ務親シク奏議ヲ聽キ玉フ而シテ中外ノ事盤錯多端官制宜シク更張スヘク財政宜シク節度ニ就カシムヘク要務ノ經畫施措スヘキ者一ニシテ足ラス此レ宜シク時宜ヲ斟酌シ古今ヲ變通シ太政官諸省ニ冠首タルノ制ヲ改メ併セテ太政官諸職ヲ廢シ內閣ヲ以テ宰臣會議
御前ニ事ヲ奏スルノ所トシ寓機ノ政專ラ簡捷敏活ヲ主トシ諸宰臣入テハ太政ニ參シ出テハ各部ノ職ニ就キ均シク
陛下ノ手足耳目タリ而シテ其中一人ヲ撰ヒ專ラ中外ノ職務ニ當リ旨ヲ承ケテ宣奉シ以テ全局ノ平衡ヲ保持シ以テ各部ノ統一ヲ得セシムヘシ此レ乃
祖宗簡實ノ政親裁ノ體制ニシテ立憲ノ義亦是ニ外ナラス此ノ如クニシテ綱紀擴張シ各部宰臣均シク其責ニ任ジ用ヲ節シ實ヲ務メ以テ立國ノ目的ヲ達スルコトヲ得バ天下ト之ヲ公ニスヘク宇內各邦ト之ヲ競フヘク
陛下中興ノ大業始メテ成緒ヲ終ヘ微臣犬馬ノ勞亦與リテ餘榮アラン若シ其人ニ至テハ必
陛下ノ聖鑑ニ由リ大局ニ明達シ時務ニ精練ナル者ヲ得テ以テ之ニ任スヘシ而シテ中外多端ノ機務ニ當ルカ如キハ實ニ臣カ堪フル所ニ非サルナリ伏テ願クハ

陛下臣カ誠ヲ察シ今ノ時ニ及テ内閣ノ組織ヲ改メ併セテ臣カ職ヲ解キ臣ヲシテ奬順贊襄ノ微忠ニ負カサラシメハ獨臣カ幸ノミニ非サルナリ言非常ナルカ如クニシテ實ニ時宜ノ已ムコトヲ得サルニ出ツ惟タ陛下之ヲ斷ジ玉ヘ謹奏

明治十八年十二月　　太政大臣公爵　三條　實美

布告布達ノ公式改正　十八年十二月二十八日内閣布達第二三號を以て「布告布達ノ儀自今官報ニ登載スルヲ以テ公式トシ別ニ配布セス」と定めらる。

内閣制　十八年十二月二十二日太政官達第六九號を以て、

今般太政大臣左右大臣參議各省卿ノ職制ヲ廢シ更ニ内閣總理大臣及宮内外務内務大藏陸軍海軍司法文部農商務遞信の諸大臣ヲ置ク内閣總理大臣及外務内務大藏陸軍海軍司法文部農商務遞信ノ諸大臣ヲ以テ内閣ヲ組織ス

と達せらる。

參事院及制度取調局ヲ廢ス　十八年十二月二十二日太政官達第七一號を以て參事院及制度取調局を廢せらる。

宮中ニ内大臣並顧問官及祕書官ヲ置ク　十八年十二月二十二日太政官達第六八號を以て宮中に内大臣並顧問官及内大臣秘書官を置くの官制を發布せらる。

内閣ニ法制局ヲ置クノ官制　十八年十二月二十三日内閣達第七四號を以て内閣に法制局を置くの官制を發布せらる。

内閣書記官官制　十八年十二月二十四日内閣達第七五號を以て内閣書記官々制を發布せらる。

内閣ニ記錄會計官報ノ三局ヲ置クノ官制　十八年十二月二十四日内閣達第七六號を以て内閣に記錄、會計、官報の三局を置き其官制を發布せらる。

内閣ニ統計局ヲ置クノ官制　十八年十二月二十八日内閣達第八三號を以て内閣統計局官制を發布せらる。

各省事務整理ノ綱領　十八年十二月二十六日内閣無號達を以て左の各省事務整理の綱領を示達せらる。

本月二十三日ノ　聖詔ヲ奉體シ左ニ各省事務ヲ整理スルノ綱領ヲ擧ケ以テ將來ノ標準ヲ示ス各省大臣此範圍内ニ

於テ便宜斟酌シ案ヲ具ヘテ閣議ニ提出スヘシ

内閣總理大臣　伯爵　伊藤　博文

一、官守ヲ明ニスル事

我ガ官制ハ草創ノ餘未ダ限ルニ定員ノ制ヲ以テセス濫弊從テ生シ官愈々多クシテ務愈々壅カルコトヲ免レス十年ニ一タヒ官制ヲ改メ教部省ヲ廢シ内務省ニ併セ各省奏判官ヲ減シテ其過半數ヲ罷メタリ然ルニ當時定員ノ制ヲ設ケテ以テ將來ヲ防範セサリシニ因リ其後又更ニ漸クニ增員シ從テ減シテ從テ加ハリ以テ其初メニ倍スルニ至レリ今ニ於テ各省大臣宜シク　詔意ヲ奉體シ左ノ節目ニ依リ各々省内局課ノ設置ヲ定メ官吏ノ員數ヲ限リ節減陶汰ノ意見ヲ具ヘテ閣議ニ付シ各省ヲシテ略均一ナラシメ成案トナシ然ル後上奏シテ裁ヲ請フヘシ

一各省次官一人ニ限ル

一各省書記官ハ其省ノ須要ニ從ヒ定員ヲ限ル

一省中各局ニ屬セサルノ分課ハ其省書記官ノ内ヲ以テ課長ニ充ツ

一省務ノ枝分シテ別ニ一部ヲ爲シ經常ニ繼續スヘキ者ヲ局トス局ニ局長一人又ハ局長局次長ヲ置ク

一本省又ハ局中ノ事務ヲ分テ課ヲ設クルハ各省ノ便宜ニ從フ

一局長及局次長ハ奏任トス局中ノ課長ハ判任ヲ以テ之ニ充ツ

一局ノ等級ヲ分テ一等局二等局トナスハ事務ノ繁簡輕重ニ從ヒ各省大臣ノ具狀スル所ニ依リ裁定ヲ經ヘシ

一局課ノ設置一定ノ後省務ノ變更ニ依リ新ニ廢置ヲ要シ又ハ新ニ奏任官ノ定員ヲ增サント要スルトキハ理由ヲ具ヘテ閣議ノ後裁可ヲ請フヘシ

一各省ノ須要スル所ニ從ヒ定員ヲ限リ參事官ヲ置キ審議立案ノ職ニ供フルコトヲ得

一以上定員ノ外出仕又ハ御用掛ノ名義ヲ以テ補任スルコトヲ得ス

一各省大臣ハ局課ノ規程ヲ定メ局長課長ヲシテ責任スル所ヲ知ラシムルヲ要ス

前項ノ規程ハ可成各省均一ヲ要スル爲ニ閣議ヲ經テ之ヲ定ムヘシ

一八等官以下ハ各省ノ須要ニ從ヒ定額俸給項内ニ於テ各省大臣之ヲ判任スヘシ

一各省大臣ハ臨時事務ノ爲ニ判任常員ノ外ニ定額内ニ於テ傭員ヲ使用スルコトヲ得

一學術專科ニ係ル官制及警視收稅典獄ノ類ハ別ニ定ムル所ニ依ル

一特ニ一事件ヲ審査セシムル爲ニ委員ヲ設ケ又ハ臨時ノ事務ヲ擔當セシムル爲ニ掛ヲ設ケ省中定員ノ人ヲ使用スルハ各省大臣ノ權内トス

一各省ニ試驗ヲ經タル試補ヲ置キ省局ノ事務ヲ練習セシメ闕官アルヲ待チテ補任シ各省試補ノ數ハ閣議ノ定ムル所ニ依ル

一試補ニ關スル規則ハ追テ裁定ヲ經公布スヘシ

一官吏一省内ニ於テ二ツノ事務ヲ兼ネシムルコトヲ得ルモ二省ニ涉リテ兼ヌルコトヲ得ス若シ止ムヲ得サルノ要用ニ依リテ兼官セシムルモ兼官ハ一年ヲ過クルコトヲ得ス

一他省ニ涉リテ兼官セルモノハ兼ヌル所ノ官俸三分ノ一ヲ增給スヘシ但武官ニシテ文官ニ任スルハ此例外ナリ

以上ハ官制ノ綱領トス各省案成ルノ後裁可ヲ經一定公布スル所アルヘシ

奏任以上ハ官ニ職權アリテ各々機關ノ一部ニ當ル者ナリ屬官ハ使用ヲ受ル者ナリ從前官制ノ區別明ナラスシテ雇等外ノ年ヲ經タル者ハ進テ屬官ニ昇リ屬官ノ年資ヲ經タル者ハ進テ奏任ニ列ス是レ試驗法ナキノ致ス所ニ由ル今既ニ試驗法ヲ定ムルトキハ凡ソ奏任ノ官ハ必ス高等試驗ヲ經ル者ニ限リ屬官ノ年勞ヲ積ム者ハ漸クニ其俸給ヲ增シ奏任初等官(卽現七等官)ト相匹等セシムルコトヲ得ヘシ其陞テ奏任トナスニ至ラハ必異常功績アリテ大臣ヨリ狀ヲ具ヘ奏請シ又ハ高等試驗ヲ經ル者ニ限ルヘシ此皆冗濫ヲ防クノ道ナリ

明治四年ニ官等ヲ定メテ以來俸給ヲシテ官等ト相配當セ

シメ以テ才ヲ使フノ道ヲ狹限シタリ今之ヲ改正シ凡フ何ノ官ヲ論セス試驗ニ由テ進ム者ハ各官繁簡ニ從ヒ各々數等俸ヲ定メ次第ニ昇テ增俸ヲ得セシムヘシ本項俸給ニ關スル規則ハ追テ閣議ノ後裁可ヲ經テ公布スル所アルヘシ

二、選叙ノ事

選叙ノ法未タ定マラスシテ人各々知ル所ヲ擧ク而シテ成學ノ士或ハ其進ム所ヲ失フ此レ皆制度ノ未タ備ラサル者ニシテ勢ノ免レサル所ナリ今官制一タヒ定マリ官仕限アルニ及テ選叙ノ法仍ホ設ケサルトキハ情弊ノ至ル所其失ニ堪ヘス而シテ行政部局其人ヲ得ルニ由ナカラントス

選叙ノ法ヲ行フニハ事創始ニ屬スルヲ以テ其規則節目ノ詳ナルハ委員ヲシテ審査セシメ閣議ヲ經ルノ後成案トナシ裁可ヲ請フヘシ今其大要ヲ擧ケテ以テ標準ヲ示ス

第一　仕進ハ試驗ニ由ラシムル事

第二　試驗ニ學術試驗ト普通試驗ヲ分ツ事

第三　學術試驗ニ初等試驗ト高等試驗ヲ分ツ事

第四　學術試驗普通試驗ノ外ニ專科試驗ヲ設クル事（會計官吏ハ記簿法ヲ試驗シ外務官吏ハ外國語學ヲ試驗シ其他技術ヲ試驗スルノ類）

第五　試驗人ハ定リタル試驗科目ノ外ニ隨意ニ其學フ所ノ專門學ノ試驗ヲ受クルコトヲ得セシメ試驗委員ニ於テ他科目ト斟酌シテ之ヲ書取シ其優等ナル者ハ別ニ優等證ヲ付シ以テ才ヲ試ミルニ遺漏ナカラシムル事

第六　內閣中ニ試驗委員ヲ設クル事

第七　各省ニ許可ヲ得テ設クル專科試驗法ハ試驗委員ト各省大臣トノ間ニ協議制定セシムル事

第八　試驗ニ依リ進ムヘキ官吏ノ出身ハ年齡性行健全才能ノ四件ヲ合セテ共ニ試驗委員ノ審査ヲ經然ル後選用スルコト

第九　學術試驗合格者ハ一定ノ期限內試補トナシ事務ヲ見習シメ又ハ候補簿ニ登記スル事

第十　現勤判任官ヨリ奏任ニ昇ル者ハ少クトモ初等學術試驗ヲ經セシムル事

第十一　判任ノ缺官又ハ需要アルトキハ普通試驗ヲ行ヒ選用スル事

第十二　現勤等外及雇ヨリ等內官又ハ本官ニ任スル者其判任官ハ皆普通試驗ヲ經セシムル事但特ニ一藝アル者ハ選用ヲ許ス

第十三　現勤判任及奏判任御用掛雇等外官ニシテ學術試驗ヲ請フ者ハ其情願ニ任スル事

第十四　試驗委員ノ紀律ヲ嚴ニシ其公正ヲ保タシムル事

第十五　地方ノ屬官ヲ試驗スルハ別段ノ方法ニ依ル事

右ハ其既略ノ目的ヲ定ムル者ニシテ之ヲ實行スルニ至テハ更ニ委員ヲ命シ精確ノ審査ヲ經セシメントス

三、繁文ヲ省ク事

維新ノ後舊ヲ變シ新ニ就クノ際下司ノ上司ニ稟請シ命ヲ得テ始メテ施行スルヲ例トシ細大多端往復織ルカ如ク相因ヲ一ノ慣習ヲ成シ一令出ルコトニ疑問百出經伺ノ文簿積テ堆ヲ爲シ往々半年或ハ一年ニシテ始メテ定マル此レ從前各省及太政官ノ事務繁劇官吏冗多ナル所以ニシテ始メハ已ヲ得サルノ勢ニ出テ終リニ因習ノ弊ニ堪ヘサル者ナリ文書繁多ノ弊ハ

第一　事務ヲ掩滯シテ疏通便捷ナラサラシメ公私ノ障害タリ

第二　官吏ヲ冗多ナラシム

第三　一部ヲ擔任スルノ官僚ヲシテ文書ニ倚賴シテ責任ノ意ヲ輕カラシム

今此弊ヲ除カントセハ左ノ方法ニ依ルヘシ

第一　凡ソ布告ノ法律ハ疑問ナカラシムル爲ニ其說明ヲ要スル者ハ可成說明書ヲ附シ各官廳ニ達スル事

第二　府縣長官及其他一局部ノ長タル者ハ法律命令ヲ施行スルニ付テ其明文アル者ニ付經伺シテ指令ヲ請フコトヲ得ス其明文ナキ者モ實際ノ事務ヲ建滯セサラシムル爲ニハ法律ノ精神ニ由リ處分施行スルヲ以テ當然トナル事

其他公文ノ底滯シテ或ハ歲月ヲ經過シ緩慢ニシテ敏活ナラサルハ施政ノ大弊ニシテ公私ノ疾患此レヨリ大ナルハ

ナシ今此ヲ救フノ要領ハ左ノ數點ニ外ナラサルヘシ

第一　文書受付往復ノ程限ヲ設ケ事ノ輕重緩急ニ從ヒ相當ノ期日ヲ定メ稽滯ヲ以テ過失トシ主任ノ官吏其責ニ任セシムル事

第二　事務ノ各局課ニ關渉スル者ハ各局課ノ間或ハ會議法ヲ設ケ或ハ主任官互ニ面議ヲ行ヒ議決ノ即時ニ捺印シ從前ノ回覽法ニ換ヘ異議附箋ノ煩ヲ除ク事

第三　文書ニ記錄ノ要用ト不要トヲ分テ其不要ナル者ハ件銘日時ヲ日記ニ登錄スルニ止メ原文ノ謄寫ヲナサヽル事

第四　各局長ハ毎週一次又ハ二次其局ノ文書往復ノ簿册ヲ査閲シ稽滯ヲ檢明シ各省次官ハ毎月一次又ハ二次其省ノ文書往復ノ簿册ヲ査閲シ稽滯ヲ檢明スルノ類ノ方法ヲ行フ事

第五　各局長以下ハ大臣又ハ次官ノ命ナクシテ定期ノ外文書ヲ留置クノ權ナキ事

以上ハ其大概ヲ略說スルニ止マル者ニシテ其實施ノ順序節目ニ至テハ固ヨリ各省ノ便宜ニ屬シ各省大臣其規程ヲ設クルノ權内ニ在ル者タリ但タ此事各省ノ整理ニ關シ可成均一ヲ要スルヲ以テ茲ニ之ヲ提擧シテ以テ標準トス

四、冗費ヲ節スル事

凡ソ行政官務整頓嚴確ナルノ國ハ其經費必節省ナラサルハナシ蓋富强ノ道ハ多費ニ在ラスシテ施ス所其實ヲ務メ緩急其要ヲ得テ以テ成功ヲ永久ニ期スルニ在リ維新以來歲出ノ歲ヲ逐テ增加スルハ内外政務ノ多端ナル實ニ已ムコトヲ得サルニ由ルト雖モ明治六年ノ會計表ニ據リ此レヲ昨十七年度ノ歲出ト比較スルニ幾ント四分ノ一ヲ增加シタリ又俸給一項ヲ以テ之ヲ言フニ明治六年ノ概數ニ據リ之ヲ十七年度ニ比較スルニ即チ十分ノ六ヲ增加シ又九年十年ノ概數ニ據リ之ヲ十六七年度ニ比較スルニ即チ三分ノ一ヲ增加シタリ實務ノ擧カル所成果ノ得ル所未タ經費ノ遞增ト相比例スルニ至ラス今宜シク務メテ制減ヲ行ヒ各省ノ定額ハ内閣ニ於テ事物ノ緩急ヲ料リ之ヲ總判畫

定シ越ユヘカラサルノ限ヲ爲シ各省大臣ハ全局ノ平衡ヲ顧ミ以テ各〻其省ノ費用ヲ節省スヘシ

奏任以上ハ官ニ定員アリ判任以下ハ各省大臣定額俸給項内ニ於テ便宜ニ使用スルコトヲ得今變更ノ際一タヒ節減ヲ行ヒ更ニ永久ニ繼續シテ濫弊ヲ防制スル爲メ各省院府縣廳ハ毎月官吏ノ員數並俸給ヲ統計シ翌月十日迄ニ之ヲ檢査院ニ報告セシメ檢査院ニ於テ其制ヲ踰エ限ニ過ル者ヲ檢出シタルトキハ内閣總理大臣ニ上申シテ處分ヲ請ハシムルヘシ

檢査院ハ單ニ會計出入ノ檢査ニ止マルノミナラス需費ノ成績ニ就テ事業ノ得失ヲ察シ各廳内部ノ處務ニ注目シ務メヲ儉省確實ノ方法ヲ計畫シテ内閣ニ提出シ以テ行政各部ノ注意ヲ促スコトヲ得セシムヘシ

各省ノ事務互相重複スル者ハ閣議ヲ經テ其一ヲ減省スヘシ

五、規律ヲ嚴ニスル事

官吏ノ品格ハ實ニ政府ノ威信ニ係リ官吏ノ忠順愼密勤勉清廉ハ政務ノ得失ニ於テ密接ノ關聯ヲ相爲ス此レ宜シク其規律ヲ嚴ニシ秩序ヲ正シクシ一ハ以テ官務ヲ整理シ一ハ以テ忠順廉潔ノ風ヲ維持セサルヘカラス九年ニ官吏懲戒例ヲ設ケテ而シテ監督審理ノ方法備ラス未タ具文ノ法タルコトヲ免レス將來懲戒裁判ヲ設ケ懲戒及罷免ノ規則ヲ定メ以テ官紀ヲ肅シ且以テ官吏ノ位置面目ヲ保護スルコト實ニ止ムヘカラサルノ必要タリ但タ此事他ノ細目ト相關係スルヲ以テ現時未タ擧行シ易カラサル者アリ抑モ官吏ノ規律ヲ張リ其品格ヲ保ツハ以テ一日モ緩慢ニ付スヘカラス各省大臣ニ在リテ宜シク

詔意ヲ奉體シ各其權内ニ於テ振勵監督シ凡ソ官吏忠順誠實ノ大義ニ乖キ法律ヲ恪守セス機事ニ愼密ナラス務ヲ執テ勤勉ナラサル者其情狀ニ從ヒ之ヲ告戒譴責シ或ハ之ヲ懲罰スヘク贈遣ノ禁ハ細大ニ及ホシ職務曠廢ノ戒メハ其有意無心ヲ問ハス老朽務メニ堪ヘサル者ハ其官ヲ退カシムヘク務メテ核實嚴明ニシテ効力アルコトヲ要スヘシ其規則ニ涉ル者ハ更ニ裁ヲ經テ制定スル所アルヘシ

官有ノ川敷溝敷寄洲川沿地等ノ拂下ヲ禁シ貸下ヲ制裁ス　十八年十二月三日内務省甲第三六號達を以て「官有ノ川敷溝敷寄洲川沿地等ハ自今拂下又ハ貸下ヲ爲スコトヲ許サス從前既ニ貸下ケタルモノハ當期ヲ限リ返地セシム可シ但物揚場等公益上ニ使用スルモノ及熟田畑ハ貸下クルコトヲ得ルト雖モ治水ニ妨害アル構造ヲ爲シ又ハ樹竹ヲ栽培セシム可ラサル儀ト心得フヘキ旨」を達せらる。

街路乘合馬車營業、人力車及宿屋取締件　明治十九年六月十四日内務省訓令第七號を以て「乘合馬車人力車宿屋ノ營業及街路ニ於ケルヤ警察上各其取締ノ方法ヲ設ケサルヘカラス而シテ民度ノ高低土地ノ都鄙ニ由リ其間自ラ寛嚴ノ差ナキヲ得サルモノナレハ必スシモ各地畫一ノ制ヲ要セスト雖モ大體ニ於テ其則ヲ取ル所ナカルヘカラス依テ今般街路乘合馬車營業人力車及宿屋取締ノ件ニ付別册ヲ編制シテ其標準ヲ示ス各地方ニ於テ各其ノ標準ノ趣旨ニ從ヒ便宜增損規則ヲ設ケ本省ノ認可ヲ經テ施行スヘシ」と街路取締規則標準、營業人力車取締規則標準、宿屋取締規則標準を公示せらる。

北海道廳設置　十九年一月二十六日内閣布告第一號を以て「北海道ハ土地荒漠住民稀少ニシテ富庶ノ事業未タ普ク邊隅ニ及フコト能ハス今全土ニ通ジテ拓地殖民ノ實業ヲ擧クルカ爲ニ從前置ク所ノ各廳分治ノ制ヲ改ムルノ必要ヲ見ル因テ左ノ如ク制定ス

函館札幌根室三縣並北海道事業管理局ヲ廢シ更ニ北海道廳ヲ置キ全道ノ施政並集治監及屯田兵開墾授產ノ事務ヲ統理セシム

登記法　十九年八月十三日法律第一號を以て登記法を制定せらる。

公證人規則　十九年八月十三日法律第二號を以て公證人規則が發布せらる。

公文式　十九年二月二十四日勅令第一號を以て法律命令の格式を制定するの必要ありと認められ公文式を定めらる。

各省官制　十九年二月二十六日勅令第二號を以て

各省官制を定めらる，內務省は此官制に依つて總務局（戶籍課圖書課）縣治局（府縣課、郡區課、及地方費課）警保局（警務課、保安課、監獄課）土木局（治水課、道路課、計算課）衞生局（衞生課醫務課）地理局（地籍課地誌課觀測課）社寺局（神社課寺院課）及會計局を置かる。

元老院官制ノ改正　十九年三月二十九日勅令第一一號を以て元老院官制を改正せらる。

所得稅法制定　明治二十年三月十九日勅令第五號を以て所得稅法を制定せらる。

叙位條例　二十年五日四日勅令第一〇號を以て叙位條例を定めらる。

取引所條例ノ制定　二十年五月十四日勅令第一一號を以て取引所條例を制定せらる。

私設鐵道條例ノ制定　二十年五月十七日勅令第一二號を以て私設鐵道條例を制定せらる。

鎭守府ニ達スル道路ヲ國道ニ編入ノ件　二十年七月一日勅令第二八號を以て東京より鎭守府に達する道路及鎭守府と鎭臺と拘聯する道路を國道に編入する旨を達せらる。

地方稅ニ關シ寄附スル金穀物件及ヒ雜收入ハ府縣會ノ議定ニ付セシムル件　二十年十一月四日勅令第五六號を以て「地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニ關シ寄附スル金穀物件ハ府縣會ノ議決ヲ經テ寄附者ノ指定シタル費途又ハ使用ニ充ツヘシ、地方稅ノ雜收入ハ他ノ收入豫算ト同シク府縣會ノ議定ニ付スヘシ」と定められた。

地方稅支辨ニ係ル道路ノ並木枯損木拂代金處分ノ件　二十年十一月五日內務省令第三號を以て地方稅の支辨に係る道路の並木枯損木拂代金は地方稅土木費雜入に組入れ並木植續費は土木費より支出すへしと定めらる。

新聞紙條例ノ改正　二十年十二月二十八日勅令第七五號を以て新聞紙條例が改正せらる。

出版條例ノ改正　二十年十二月二十八日勅令第七六號を以て出版條例が改正せらる。

版權條例ノ制定　二十年十二月二十八日勅令第七七號を以て版權條例を制定せらる。

脚本樂譜條例ノ制定　二十年十二月二十八日勅令第七八號を以て脚本樂譜條例が制定せらる。

寫眞版條例制定　二十年十二月二十八日勅令第七九號を以て寫眞版條例が制定せらる。

市制及町村制ノ制定　明治二十年四月十七日法律第一號を以て「地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ增進スルコトヲ欲シ隣保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益之ヲ擴張シ更ニ法律ヲ以テ都市及町村ノ權限ヲ保護スルノ必要ヲ認メ」られて市制及町村制が發布せらる。

以上は明治維新の當時より地方自治制度たる市町村に關する制度が完成せられたる等內政に關しての法制上の概況である、吾人は更らに政治方面の大要を叙述し此二方面から當時國情の推移に徵して地方自治團體に對する制度制定の顚末關係を明かにせんことを期するのである

二月五日貴族院に於て關直彥と鳩山文部大臣との間に左の質問應答があつた。

關直彥「……元來日本ノ文部省ノ方針敎育ノ方針ト云フモノハ、一體何ヲ敎ヘルノ方針デアツタカ人ヲ造ルノガ方針デアツタカ或ハ物ヲ言フ機械ヲ造ルノガ方針デアツタカ私共ハ學校ト云フモノハ人ヲ造ツテ呉レル人ノ人タル道ヲ先ヅ敎ヘテサウシテ人ヲ造ツテ呉レルモノデアルト思ツテ居リマシタケレドモドウモ、人ヲ造ルト云フ方針ニ行カナクテ動モスルト物ヲ言フ機械ヲ造ルト云フコトニ重キヲ置カレ居リハシナイカ……」

鳩山文部大臣「……人ヲ作ルノガ主ナノカ、物ヲ言フ機械ヲ作ルノガ主ナノカト云フヤウナ御話ガアリマシタガ、勿論此點ニ付キマシテハドウカシテ良キ人間、良キ日本人ヲ作リタイト云フヤウナ積リデ色々苦心ヲシテ居リマス。良キ日本人ヲ作ルト云フ中ニハ、無論國體ノ尊嚴デアルトカ、皇室ノ尊嚴ト云フコトヲ辨ヘマシテ、サウシテ人間トシテ缺クル所ノナイ人間、良キ日本人トシテ世ノ中ニ生活ガ出來ルヤウナ人間ヲ作リタイト思ツテ居リマス……」

吾人は此質疑應答の形式に止まらざらんことを熱望する。